

## 台所の灯りに宿る、やさしい共生

蘇州大学外国語学院

吴顾琰

吉本ばなの『キッチン』を初めて読んだとき、起伏に富んだ物語展開に心を奪われたというよりも、行間からあふれ出る日常のぬくもりに、静かに心をつかまれた。読み終えたのはちょうど朝方で、台所の冷蔵庫の低いなりと、窓の外に鳥のさえずりが溶け合う中、ふと気づいた。食材や調理器具を置くこの空間が、日本文化を理解するための媒介となり、さらには中日両国の感情の奥底に潜む共鳴を映し出していたのだと。

吉本ばなの描くキッチンは、決して冷たい機能空間ではない。そこは感情が行き交う器であり、口に出されない思いやりは、「お茶でも飲む？」という一言や、朝そっと差し出される味噌汁の中に隠されている。この「言葉ではなく行為で語る」やさしさこそ、日本文化の最も心打つ注釈である。奈良の古寺の傍らに生える苔のように、目立たずとも歳月の中で人の心の隅々に広がっていく。かつて京都で出会った老舗の主人の姿が、ふと脳裏によみがえる。客が店に入っても「いらっやませ」とは言わず、黙って背を向け、焙じたばかりの煎茶を淹れてくれる。湯のみの底には二枚の茶葉が静かに開き、手を温めるのにちょうどよい温度だった。その控えめな善意は、小説のキッチンに満ちるぬくもりと重なり合い、最も真摯な思いやりは、決して声高に語られるものではないのだと教えてくれた。

そうして私は、記憶の中の祖母の台所へと心を向ける。土のかまどにかけられた鉄鍋はいつもぐつぐつと音を立て、蒸したもち米の香りが薪の煙と混じり合い、木の窓枠を越えて路地いっばいに漂っていた。祖母は「大事にしているよ」などと口にする事はなかったが、私が学校から帰ると、かまどのそばから焼き色のついたサツマイモを一つ取り出してくれた。熱さに手を振り回す私を見て、祖母は目尻にしわを寄せて笑っていた。『キッチン』を読む中で、主人公みかげが他人の台所で得る安らぎは、私の幼い日の台所の記憶と不思議なほど重なった。そのとき私は悟った。台所の「煙火（えんか）」のぬくもりは国境を越える言語なのだ。東京のモダンなキッチンであれ、中国の農村の土のかまどであれ、立ち上る湯気の中には「家」という共通の暗号が潜んでいる。それは、人間が温もりを求める最も本能的な感覚なのだ。

物語に登場する、洗い込まれて色あせたエプロンが、いつまでも心に残っている。田辺さんの死後、それは丁寧に畳まれ、台所のいちばん目立つ場所に掛けられる。亡き人の体温が、この世に留められているかのようだ。それを思うと、母が大切にしまっている青花の茶碗を思い出す。縁に小さな欠けはあるが、祖父が生前もっとも愛用していた器である。母はよく「この古い茶碗でご飯を食べると、あの人がまだ食卓にいるみたい」と言う。歳月の痕跡を刻んだ物は、決して冷たい置物ではなく、感情の延長なのだ。中日両文化には、「物に深い情を託す」という共通の執念がある。日本では古い茶碗のひびを金継ぎで生かし、中国では年長者の古着を座布団に仕立て直す。私たちは皆、日常の品に思いを預けることで、大切な人が決して完全には去らないよう、やさしく記憶をつなぎ留めている。

みかげにとって料理は癒やしであり、私にとっては生活を読み解く窓である。彼女が包丁を握り、鍋

をかき混ぜながら砕けた自分をつなぎ合わせていく姿に、私は故郷の路地にあるワンタン屋の主人を重ねる。彼は毎日午前三時に生地をこね、包むワンタンはいつも皮が薄く具たくさんで、スープに浮かべる干しエビの配置にまで気を配る。東京のラーメン店の職人が、十数時間もかまどを守って出汁を取る姿と同じだ。こうした平凡なことへの徹底した集中は、成功のためではなく、生活そのものへの素朴な敬意から生まれている。田辺さんの「一食を大切に作れば、人生はそう悪くならない」という言葉は、中国の市井にもそのまま当てはまる。靴修理の職人が老眼鏡をかけて丁寧に直し、街角の仕立屋が寸法を何度も測り直す――私たちは皆、真摯さによって生活の粗さに抗っている。それは両国の人々に共通する人生哲学なのだ。

みかげはやがて寝室で安らかに眠れるようになるが、それでも朝になるとキッチンでコーヒーを淹れる。この変化は、日本の「一期一会」の禅的精神を思わせると同時に、祖母がよく口にしていた「今を生きなさい」という言葉を思い出させる。キッチンが避難所から生活の出発点へと変わったのは、彼女がようやく悟ったからだ。温もりは遠くにあるのではなく、一杯の温かい飲み物、一膳の温かい食事という、ありふれた日常の中にこそあるのだと。それは中国文化にいう「人間味あふれる暮らしの火こそ、凡人の心を最も癒やす」という智慧と、本質的に同じ生命感覚である。

朝の光がコンロ脇のタイルを照らすとき、私は理解した。中日文化の共鳴は、決して壮大な命題の中にあるのではなく、こうした細やかな日常の襞の中にこそ宿っているのだと。味噌汁の塩味と祖母の鶏スープの滋味、古いエプロンのぬくもりと藍染めの上着に託された思い――表象は異なっても、その根底にあるのは温もりへの希求と、寄り添いを大切にする心である。相手の文化の中に見慣れた感

情の痕跡を見出したとき、理解は静かに芽吹いていく。

吉本ばななが描いたのは、孤独と癒やしだけではない。それは、生活の本質へと私たちを招く一通の招待状でもある。そしてその招待状の中で最も尊いのは、中日両国の人々が共有する暗黙の了解——煙火の世における、やさしい共生である。この共通のぬくもりは、どんな宣言よりも力強く、国境を越える理解は、いつだって一杯の温かいスープの温度の中に宿っているのだと、私たちに信じさせてくれる。